

思いを語ることを通して

3年C組担任 山口 智恵子

《3年C組とともに》

もがきながらの1年だった。生徒の前でこれまでずっと私は教師の顔をして、子どもたちをこうしたい、学級をこんなふうにしたいという教師としての働きかけばかりを考えてきた。そんな自分の姿に気づかされ、いったい自分はなに様なんだと自問させられた。そして、同じ何の肩書きもない裸の人間として、子どもたちと、同僚と語れることのすばらしさを身を持って知った日々であった。

決してハッピーエンドではない。この1年、自分がやってきたことが全て正しいとは思わない。自分の想いを吐き出すことで、傷つかなかった人がまったくいないとも思わない。私の取り組みが子どもたちに全てプラスになったなどと決して思わない。

しかし私は、教師としての顔で子どもたちの前に立つのではなく、ごまかしのない、自分に納得のいく生き方をしている人間として子どもたちに接したいと思う。

《自分を語る》

教師として子どもの前で話す。私にとってやはりこれはたてまえになる。机上の空論のようになってしまう。しかしながら、人一倍欠点の多い私が、ダメな部分、劣る所をさらけ出すのはさすがにはばかられた。子どもたちの前で形無し、これから何を言っても底が知れている。バカにされる。子どもが言うことをきかなくなる。権力の失墜だ。学級経営もうまくできなくなる。などどうしても身構えてしまう。

しかしこれこそが、教師という職を選びながら、どこか抵抗があり、好きになれない自分を感じる大元であったのだ。十数年教師という職業にありながら、なぜか誇りをもてなかった理由なのかもしれない。不完全、未熟なものにも関わらず、ましてやひたむきに努力することを、もがくことを押し隠し、口先だけでただひたすらかつこよく決めようとする、そんな自分の姿にどこか後ろめたいものを感じていたのからだと思う。

種々の会に参加した際、意見を述べる人の姿に、今までの自分をかいま見る思いをよくする。一般論を述べ、自分の想いを言うことができている。自分がどう関わったのかを述べられていない。そういう姿に気がつくことができるようになっただけでも少し感覚は磨けてきたかなと思ったりする。

決して自分の態度を棚にあげたまま話をしない。常に自分の内面と向き合って話をしよう。また、「それでも人権学習を奨める人間か。」と後ろ指さされないよう日常生活の上でもしっかりしなければならないと思う。

全体学習で堂々と意見を述べる子どもたちにはずかしくない歩みをしたいと思う。

そのために常に自分を語れる人間でいたいと思っている。主語述語がはっきりしない文になっても、未熟な面もいたらない面も全てありのままを出していこうと思う。「それはおかしい。」「そこがダメなんだ。」と指摘されれば、そこから一步踏み出せるし、自分を正していけるきっかけになるのだ。人それぞれに段階があるはずである。今の自分からはい上がろうと努力している姿があれば、何も恥じることはない。口を噤んで顔を伏せて、時間が過ぎていくのをただ待つような人間にはなりたくない。

《主題設定の理由から消えた文》

「最初読んだときはすごいなあ、と思ったけど、2回、3回と読んでみたとき、もう一つ伝わってこない。確かにクラスのことをどう思っているか、子どもたちにどんなふうに関わってきたかはよく分かるが、自分の中にどういう同和問題に対する想いがあるかが伝わってこない。高いところ、つまり、自分を教育者という立場において、遠くから見ている感じがする。」と指摘され、「同和問題をどのように自分の問題として捉えているのか。」と尋ねられた。

私自身のなかに潜んでいる差別意識。これを回避していたことに対する鋭い指摘であった。

主題設定の理由から意図して削除した内容があった。私の父に対する想いである。なぜこの内容を削除したのか。悩みに悩んで結局活字にすることをやめた。しかし今から思えば、やはり差別からの逃げの姿勢以外のなにもものでもなかった。私の差別意識を知られるのが恐い。自分の身内のことを世間にさらすことへの不安。全部ありのままに何もぶちまけなくても……。

しかし私の意識の原点はここにあった。自分の差別意識の根本はここに行き着くのである。

手先が器用でちょっとした物はなんでも自分で工夫してやってのける父、学校の先生以上に物知りで、読書好きで、書家である父、そんな父を私は尊敬し、この上なく慕っていた。にもかかわらず、幼い頃から唯一、父の職業を聞かれるのが苦痛でたまらなかった。父はいつも泥にまみれていて、背広を着て磨いた靴を履いて会社から帰ってくる友達のお父さんとは明らかに違っていた。かつこが悪かった。

小学生だった頃、降りだした雨に父がわざわざ学校へ傘を届けに来てくれた。その父に気づいていながら、友達をふざけながら追いかけるまねをして、傘を持って私を探す父から隠れようとしたことがあった。下校に困らないようにと、忙しい農作業をそのままにして急いで来てくれた父は、よれよれのほころびかけの作業着姿、この日は特にみずぼらしく見えた。

「今の人、誰のお父さん？」とか、「きたない親父だな」などと誰も言わなかった。そう思ったのは私自身であった。

その後もずっと私は、「家の人は百姓か。」と言われるのがいやだった。「おうちは何をしているの。」と尋ねられるのをおそれていた。「百姓」という言葉の持つ劣悪なイメージがいやだった。

なぜこんな意識を持つようになったのだろう、小学生のころから。

それは、社会に渦巻く差別があったからである。部落差別だけでなく。学歴差別、職業差別、貧富による差別、身体の不自由な人に対する差別など。父の職業を恥じるように植え付けられてしまった過程にはこういった社会の差別性が反映しているのだ。

このことに対し怒りを持てば、私の取り組みにも、ごまかしなどなくもっと前向きで厳しいものになっていたはずである。

これらの差別、社会の差別性に気づかない限り、差別を自分に関わってくる問題と捉えられない。自分の周りにどういう差別があってどういうふう to それを明らかにしていくか。これこそが自分の問題として同和問題を捉えるということなのである。

自分が差別心の塊であることを認識すると同時に、差別社会に立たされている自分に気づくことが第一歩なのである。

差別は決して被差別部落だけの問題ではない。社会には種々の差別があり、下見て暮らせという現実がある。差別が息づいている社会構造がある。周りのこういう差別に気づいていないから

自分のものとして捉えられていないのである。

被差別部落に生まれようとそうでなかろうと、いつでも被差別者になる現実があるのである。

人につけてもらった心の火は消えやすい。そういう人がいなくなったら消えてしまう。でも自分の中にその火を燃やすマグマがあれば決して消えることがないといわれるのも、まさにこういったことからであろう。

しかしこの一年もがきながらではあるが、同和問題に取り組んできて、今ははっきりと父のことを自慢できる私になれた。父を堂々と誇れる。一生懸命働いてきた父のことを、心から感謝と尊敬の念を持って語れる。

《涙》

差別をなくそうと取り組む中に涙がどうしてもついてくる。なくそうとしているのに涙が出る。それほど厳しいものがある。

最初私が触発されたのも、涙ながらに語る子どもの姿であった。この涙の原因の中に私がいんだ。そう気づいたとき打ちのめされる思いだった。

私は父のことを話すとき、いつも涙が出てしまう。これはきっと、傘を持って私を探す父が常に心にあるからだ。

「なぜ涙がでるのか。」「その涙って何なのですか。」「怒りを持ったら涙など出ないはずだ。」とよく言われる。

しかし私は、自分を変えようとしたとき、自分を変えたいとものがく時、涙が出る。

父から隠れた自分を思い出し、そんな自分からはい上がろうとすると涙が出てしまうのである。

しかし私はいつまでも、あの日の隠れようとした自分を忘れないでおこうと思う。

《信頼》

友の信頼を得る、友を信頼する事の大切さを力説するが、相手を信頼しなければ言えないこと、これこそが部落差別の実体なのである。

では信頼とはどうやって得られるのか。

信頼しているのはこっちだけかも知れない。打ち明けて裏切られていった先輩がたくさんいる。信頼してもらおうと自分のことをしゃべってみても、浮いてしまう現実がある。浮いてしまうこと自体差別があるということなのである。

《その後のクラス》

全体学習をして、そのたびに3Cが一つにぐっとまとまってきたかというところではなかった。依然としてA男の不登校に対しどうにもできないでいたし、一部の女子の間で小さな問題は絶えなかった。

学校に来れなくなったB子。友達とのトラブルが引き金になったとはいえ、今までずっと我慢してきたことについて耐えられなくなり、それへの抵抗の一つの表し方として登校拒否という形をとったのではないだろうか。B子自身の自分との闘いにより、暗闇を脱出でき、肩の力を抜いて学校生活を送れるようになった。

また、後半、解決はつきもとのように明るく過ごせられるようにはなったが、C子の友達拒否。

D子の登校拒否などがあり、決して順風満帆ではなかった。

しかし、こういった問題が表面化してくることに、独りよがりかも知れないが、私はこれこそが第一歩であると思った。「ここをがんばれ、がんばったら一つ成長できるんだ。」と心の中でこの子たちにさげんでいた。いろいろなことが見えだした証拠なのだ。

小さいさかいがあるということは、自分の思いを主張できるようになったということなのではないだろうか。といいながらも、うまくいかない友達関係に苦しんでいる子を見るのは心が痛んだ。子どもたち自らの解決を待たず、いらぬお節介をして、かえって話をこじらせてしまったり、私への怒り不満を受けとめる余裕をもてず、私自身苦しみ暗い想いになることもあった。

「私は先生に言いたいことがある。」とあゆみに書いてきたE子。「言いたいことはきちっと言える人間になりたいから」ということで、私の態度に対する不満や疑問をぶつけてきた。自分の思ってもみなかったところで、私に対するいらだちを持っていることに対し、ショックを受けた。しかし、直接想いをぶつけてくれるということは、私を信じ、私にまだ期待を持っているということだと気を取り直し、返事を書き誤解を解こうとした。

クラスでの話し合いもぎくしゃくとしたものが続いた。話し合いのたびに重苦しい空気が流れ、解決の糸口の無いまま終わってしまうことが多かった。

※

今日の話し合いはまた中途半端に終わってしまいました。

私はみんなの意見を聞いていて、Bちゃんが学校に来れないほどの悩みの原因は、私が土曜日みんなの前で自分の友達関係のことをもちかけたせいではないかと反省しています。

でも休んでしまったらクラスの話し合いの時に友達の意見を聞くこともできないし、私たちの思いも伝わらないので、絶対マイナスだと思います。人は誰でも一人はいやです。ならどうするかと言うと、自分から行動しなければなんにもならないと思います。

みんなと友達になるチャンス、このチャンスというのは自分でつかみとるものだと思います。自分が行動しないと、ほかのみんなもついてきてくれないと思います。

(中略)

今日みんなに言い残したことがあります。

「3Cに期待していない」なんて思ったり、言ったりしているようですが、自分の意見も言わないのに期待していないなんてそんな勝手なことを思ってほしくありません。私は3Cを信じています。意見言わないのに期待していないと言っている人は、ほんの少しのがんばりでも、それについてきてくれる友がいることに気づいていないと思います。そしてそんな投げやりな人こそ、その期待されていない一人になるということを。私は早くみんなにこのことを気づいてほしいです。

※

僕はいろいろなことを言うつもりだったけどその10分の1も言えなかった。Fさんの言い方はきつかったけど、その通りだと思う。今のまま卒業してしまったりいけないそれはみんな思っていると思う。BさんやA君が学校に来たくない気持ちも、同じような苦しい想いをした僕にはよく分かる。だけど、今僕が何をしたらいいかわからない。

今日の話し合いで、下を向いている子に下を向かないでほしいという意見があったが、僕はそのことが本当に正しいことなのかどうかよくわからない。

いろいろな疑問が出たけど、その答は一つも出なかったように思う。

※

今日の話し合いはすごいむかついた。一生懸命がんばっているやつとなりで、「どうでもいいよ。」とか「はやく終わってくれよ」っていうような顔しとるやつがいたり、下うつむいて何か遊んでいるやつとか寝ているやつとか、ずっとすましたままにいるやつとか、本当に一人一人殴っていきたくらいだった。どうして発表しようと言っても何も言わなかったり、別の話を持ち出したり、「そんなんやってくれるか。そんなこと思ってないよ。」とかよく言えるな。自分もがんばろうという気、ないのか。

※

先生やみんなは何を望んでいるんですか。どんな話し合いの終わり方をしたいんですか。心を求められていない。言葉だけを求めているように思えた。何よりも恐いことだ。心を求めるのであれば腹は立たないのではないのでしょうか。いらいらしないのではないのでしょうか。言葉や形を求めようとするから、腹が立つのです。表現＝言葉かもしれないけど、自分なしで意見を言ったらうそつきになってしまう。気持ちのいい終わり方って何……。

《全体学習》

答が決まっているという今までの授業を打破していく。

悪いイメージばかりを植え付けるから、部落の子が涙して語らなければならない。こうなると同情に終わってしまう。

部落の子はかわいそう。かわいそうだから差別してはいけないんだ。

部落の子にこんなことを言ったら悲しむぞ、怒るぞ。

こんなことだけがわかる。

こういう意識を植え付ける授業を打破していかなければならない。また、一つのクラスがどうがんばっても、学年がつながらなかったら部落の子が誇りを持っていく生き方にはつながらない。

部落の子が血を吐くような想いで言う。この子だけがなんでこんな想いをしなければならぬのか。

部落出身の血を吐くような想いをさらすだけで終わってしまっただけではいけないのである。

自分自身を変えようとしている友達の姿を見て、自分もよりよく変わりたいと願うのである。

自分も仲間になりたい。だから意見を続けよう。ここで思いをつなげなければ仲間になれない。

みんなが一生懸命取り組む中、それぞれが意見を出していくことで、主体的に取り組み始める。自由に言い出せる雰囲気をつくっていく。こういうことが全てを克服していく土台になっていくのである。

涙を流し語る子をこれからどうするか。それはこれからの課題である。というだけで終わらせてはならない。

また、これからはがんばるということによって終わってはならない。どうがんばるかを具体的に明らかにしていかなければならない。

《子どもたちの意識の開花》

※

今まで、みんなの言葉、もちろん私も含めてだが、ひとクラスの全体学習が終わり、次の学年全体の時間になると、口を揃えて、こういう意見がでたと思います。「〇組の授業はすばらしかつ

た。」「〇組の授業はとてもよかった。」こんなのばかりが最初の言葉だったように思います。それはもしかすると、いやきつと、“評価”というものではないでしょうか。これは、よいか悪いかを評価する言葉ではないでしょうか。私たちが全体学習をしたときだってそうでした。よかった、悪かった、そんなことを言ってほしいんじゃない。私たちはみんなにほめてもらうために全体学習しているのと同じなんだってさげびたかった。でも自分自身もみんなと同じだったから言えなかった。うん、うん、つてうなずいてほしいんです。

それが今日のこの最後の全体学習でできた、やっどできたと思いました。一人一人の言葉にうなずけた。みんな同じ心になっていたと思いました。

※

この全体学習に初めて出会ったとき、矛盾した差別に怒りました。家の人と話し合いもしました。泣きながらおじいちゃんに「それはまちがっている。」と言ったことも何度もありました。そしておばあちゃんは、「あなたがそんなにのめり込んでどうするの。あなたも大人になったらわかる。」と言いました。私はそれから泣くことが、怒ることがばからしくなっていました。2年生の時の全体学習はただ手さえあげればいいと思い、手をあげることにしました。

3年生になり3Cのみんなと出会い、友達関係や部落問題を真剣に捉えることができました。このとき本当の涙を流しました。そして今、1年の時、家の人と話し合い流した涙がただの同情にしかすぎなかったことに気づきました。おばあちゃんが私に「どうして部落差別がいけないのか言ってみな。」と言ったとき、私は確かに「そんなの何も悪いことしていないのに差別されるなんてかわいそうじゃない。」と言いました。その時まで私は部落の人がかわいそうにしか見えませんでした。「部落問題なんかあまりのめりこまないで普通にしたらいい。」という言葉が私の心から離れませんでした。同和問題に対して熱い思いがこみ上がってきても、これ以上はやめとこうと、どこかで気持ちを押しつけてブレーキをかけていました。発表することが本当に大事なのかなって真剣に考えました。今までの全体学習の自分の取り組みを振り返って自分が考えてきたことを思い出してみました。変わりたいという自分と、このまま楽な道をいこうとする自分の二人が私の中にいます。

しかし、明らかに私は3年になって変わったと思います。

《真実を求めて》

この1年を振り返って、思いつくままの羅列になってしまったが、これだけは言える。

同和問題について語り合うことを通して、人間対人間の真の心にふれあえた、ということである。年齢を越えて、役職を越えて、職業を越えて、その人の人間性にふれられることができた。みんな、より美しく生きたいともがいていた。一歩階段を登ろうとしていた。こういう人たちに出会い、素直な気持ちになって、自分の心の中を見つめることができたのである。そして、身構えず自分を出すことができるようになったのである。

心を洗える機会を作ってくれた子どもたち、同僚、出会えた人々に感謝したい。

へこたれそうになると、子どもたちの言葉に、立ち上がる姿に勇気づけられ、励まされてきた。熱っぽく思いを吐き出す人たちに力づけられた。

これからも自分の心の中にある真実を求めようとする気持ちを信じて、そして、家族を含め自分をとりまく人々の純粋な部分を信じて、思いを語っていきたい。